

社会生活力を育む授業づくり (2) —自分の力を十分に発揮していくための支援を通して—

最上一郎^{*}・田淵 健^{*}・藤原有紀^{*}・立原幸枝^{*}・今井真実^{*}・長谷川智教^{*}
我妻則明^{**}・鎌田文聰^{**}・宮崎 眞^{**}・名古屋恒彦^{**}・田代高章^{**}
(2010年1月29日受理)

Ichiro MOGAMI, Ken TABUCHI, Yuki FUJIWARA, Yukie TACHIHARA,
Mami IMAI, Tomonori HASEGAWA
Noriaki AZUMA, Fumisato KAMADA, Makoto MIYAZAKI
Tsunehiko NAGOYA, Takaaki TASHIRO

Conducting Classes to Cultivate the Strength of Social Life
— Through Support to Augment their own Strength —

I はじめに

本研究は、2008（平成20年度）から2009（平成21年度）までの2年次計画のもと、児童生徒の社会生活力の育みを目指した授業づくりの在り方を追究していくものである。

1年次目は、本校としての社会生活力について検討し、「社会生活において、一人一人が最も豊かな社会参加を実現していくために、自分の力を十分に発揮し、主体的に生きていく力」ととらえることとした。また、社会生活力を育む授業づくりの基本的な考え方として、「児童生徒が自分の力を十分に発揮し、主体的に活動する授業づくり」を目指すこと、そのための手立てとして、児童生徒を取り巻く環境を整えていくという考えのもとに授業づくりを進めていくことを確認した。さらに、具体的な観点として、「単元・題材の設定」、「日程計画」、「活動内容」、「場の設定、教材・教具」、「教師・友達のかかわり」、「保護者・地域の人々とかかわり」の6つの観点を設定

し、授業づくりを行っていくこととした。これらの基本的な考え方や手立てのもとに授業実践を行い、社会生活力を育む授業づくりの在り方を検討することができた。（最上、田淵、藤原、立原、渡辺、我妻、鎌田、宮崎、名古屋、田代2009）

2年次目である今年度は、さらに授業実践を積み重ね、より良い授業づくりの在り方を検討しながら、児童生徒の社会生活力の育みにつなげていくこととした。

II 研究計画

今年度の計画は、以下の通りである。

- 1 社会生活力を育むための授業づくりの確認
授業づくりの内容や方法について、学校全体及び各学部ごとに確認する。
- 2 社会生活力を育むための授業づくりに基づく授業実践
6つの観点到して、具体的な支援等を検討しながら授業実践を積み重ねていく。

* 岩手大学教育学部附属特別支援学校、** 岩手大学教育学部

3 研究のまとめ

授業実践を通しての、研究の成果と課題をまとめる。

Ⅲ 研究の実際

1 社会生活力を育む授業づくりの確認

1年次目に確認した基本的な考え方や6つの観点到即して授業づくりを行っていくことを再確認した。また、指導の形態ごとの指導計画作成手順を確認し、授業実践を積み重ねていくこととした。

指導の形態ごとの指導計画作成手順は、図1の

通りである。

計画については、各学部ごとに社会生活力にかかわる評価の観点（児童生徒の姿）を設定し、その観点を受けて、「個別の指導計画」と「単元・題材の指導計画」を相互に関連させながら計画を作成していく。

まず、指導の形態ごとの個別の指導計画を作成する。同時に単元・題材の指導計画における年間計画を作成する。次に、単元・題材の構想を立て、活動内容や日程、教材・教具等の具体的な支援を考えながら、単元・題材における個別の指導計画を作成し、授業に臨む。

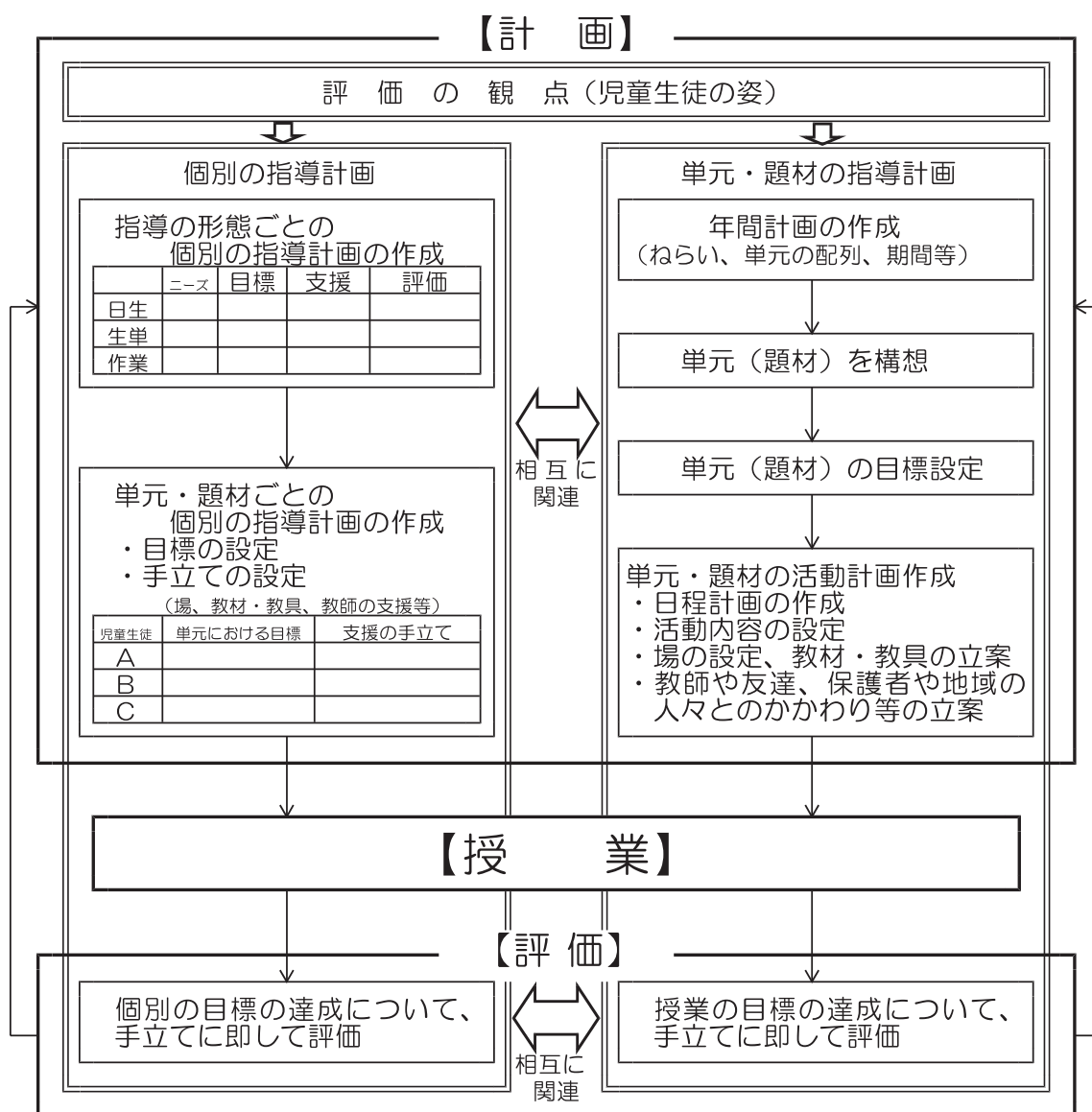


図1 指導の形態ごとの指導計画作成手順

評価については、個別の目標及び授業の目標が達成されたかどうかを支援の手立てに即して、評価をしていく。両者は一体的な評価であり、相互に関連させながら評価を行う。

個別の評価については、日々の授業における児童生徒の具体的な様子を丁寧に見取りながら、単元・題材終了後に「文章表現による評価」、「目標に即した評価」、「支援の手立てに即した評価」を行っていくこととした。

授業の評価についても、単元・題材終了後に授業づくりの6つの観点に即して、支援の手立てが有効であったか、目標が達成されたかの評価を行うこととした。

また、単元・題材を通しての評価を積み重ね、各学部ごとの評価の観点に書かれてある児童生徒の姿が多く見られたことを、児童生徒の社会生活力の育みととらえることとした。

2 授業実践例

【実践例1】小学部生活単元学習「つくし畑をつくろう①」

(1) 授業づくりについて

① 単元について

本単元は、小学部つくし組（5、6年生7名）の児童が、どんな野菜を作って食べたいか実物をもとに自分で選ぶことから始め、土砕きや畝作り、マルチ張りなどの畑作り、種や苗の購入と定植、オリジナルTシャツの作成、看板作りなどの学習活動を約1ヵ月にわたって展開していく単元である。

② 支援の手立て（6つの観点）

ア 単元・題材の設定

土に触れることを好み、スコップやシャベルなどの道具を使うことに興味がある児童が多いことから、畑の活動に対する関心があると思われる。児童の興味・関心を生かし、畑の活動を積み重ねることは、経験の拡大を図ることができる。さらには、より良い支援や手だてを工夫した授業づくりを実践することで、児童が好きなことに向かう、最

後まで活動するなど、自分から活動する姿を導き出せるのではないかと考える。また、友達や教師あるいは地域の老人クラブ（睦寿会）の方々とかかわりながら取り組むことで、社会生活力が育まれるのではないかと考え、本単元を設定した。

イ 日程計画

児童の興味・関心を生かしながら畑にかかわる様々な活動を取り入れた。また、単元の最後には、畑の完成という達成感をより感じられるよう地域の老人クラブ（睦寿会）の方々を招いてのパーティーを実施する計画とした。

ウ 活動内容

- 単元を進めるに当たり、事前に計画表を提示することで活動に見通しがもてるように工夫していく。
- 繰り返し取り組める活動である畑作りを単元の中心に据える。
- 畑の活動が、天候に左右されることも考えられるため、雨天時を想定した活動内容としてペットボトルを利用したもぐらおどし作りを準備する。
- オリジナルTシャツを作ることは、絵を描くことが好きな児童も多いことから、実物の野菜をもとに描いた絵がTシャツになり、畑の活動のたびに着用することで、畑の活動への意欲の向上へとつなげていきたい。
- オリジナルTシャツ作りでは、イメージをもちやすくするため、実物の野菜を用いて絵を描くことに繰り返し取り組んでいく。
- 睦寿会の方へオリジナルTシャツを作成しプレゼントする。
- 看板作りは、友達と協力して作り上げる作品として取り組んでいく。畝ごとに看板を作成することは、視覚で確認できない根菜などの成長を楽しみに待つ一助としてほしいと願っている。でき上がった

看板をつくし畑の目印とすることで、自分たちの活動場所をより認識し、畑の活動時間を楽しむするのではないかと考える。

エ 場の設定、教材・教具

場の設定について、もぐらおどし作りやオリジナルTシャツ作りは、学級経営上1ヶ月しか経過していない時期であるため、児童の実態を考慮して、学校生活の拠点である教室で行うこととする。看板作りでは、畑の活動に対する意欲を高めるために、畑の近くに活動場所を設ける。

教材・教具については、児童が主体的に取り組むことができるように、児童の実態に応じた工夫に努めていく。

オ 教師・友達のかかわり

友達同士がかかわり合えるよう、活動内容により小グループを構成し、教師も一緒に活動するようにした。

カ 保護者・地域の人々とのかかわり

地域の老人クラブ（睦寿会）の方々との畑作りでは、よりかかわりが深まるように、毎回、グループやペアを構成し、共に活動するようにした。



写真1 野菜の絵を描く様子

③ 看板作りにおける活動の様子

大小2種類の看板を同時に作成し、児童が楽しみながら取り組むことができるように、各工程の名称を「〇〇ステージ」とした。看板作りの工程は、可能な限り細分化して、児童の多様な興味・関心に柔軟に対応したり、実態を考慮した活動の設定ができるように、切る、塗る、描く、組み立てるなどの9つのステージを用意した。さらに、友達の様子が見えるような活動場所や児童の位置を工夫した。

看板作りを繰り返すことで、自分の活動に集中して取り組む様子が見られた。毎日取り組んでいく中で、友達の活動にも目を向け、自分からやりたいステージを言う児童も出てきた。

お絵かきステージでは、オリジナルTシャツ作り同様、実物の野菜を見ながら絵を描く活動を取り入れたことで、児童が自分から絵を描く姿が見られた。児童の実態により、お絵かきステージを中心に絵を描く活動を繰り返した結果、活動内容の理解度が少しずつ深まり、教師の支援も減り、一人で絵筆を持ちながら取り組むようになった。

教師が活動内容を提示する前に、刷毛を持って塗り始めたり、細かな部分に自分で気付いて塗り残しなく塗るなど、積極的な行動が現れた。興味・関心があることが、自分から取り組む姿につながり、活動に見通しがもてたことで、得られた姿であると考える。



写真2 丸棒に色を塗る様子



写真3 畑に看板を立てる様子



写真4 睦寿会の方々と畑の完成を喜ぶ様子

(2) 成果と課題

表1は成果と課題を6つの観点に即してまとめたものである。

表1 成果と課題

項 目	成果と課題
①単元・題材の設定	・畑の土作り、畝作り、種まきなど畑そのものの活動と、もぐらおどし作り、オリジナルのTシャツ作り、看板作りなどの畑にかかわる活動を長期的に展開することができた。様々な活動の中で児童は好きなことに向かったり、最後まで活動したり、意欲的に取り組むことができた。
②日程計画	・活動を週単位で構成することで、見通しをもつことができた。本単元では、長い期間の単元であったため、活動ごとに流れを提示した。単元全体において、今の活動が全体のどの部分なのか、伝えていくことも必要と思われる。「つくしパーティ」がゴールであることを、もっと強調しても良かった。
③活動内容	・Tシャツ作りや看板作りにおいても、実物の野菜を提示することで、イメージをもち、自分からどんどん野菜の絵を描くことができた。 ・看板作りでは、児童の多様な興味・関心に柔軟に対応したり、幅広い児童の実態を考慮し、9つのステージ（作業工程）を用意した。自分が今取り組んでいる活動は、看板作り全体におけるどの部分なのかという見通しをもつことが難しい児童もいたが、一つ一つのステージにおいては、自分から道具を持って活動場所に向かったり、完成して笑顔を見せたりする場面も見られた。
④場の設定 教材・教具	・看板作りでは、活動場所を畑近くに設けたこと、オリジナルのTシャツを毎回着用して、繰り返し活動に取り組むことで、「畑へ行くぞ」という気持ちが高まり、率先して畑に向かう児童も見られ、活動に対する意欲を高めることができた。 ・看板作りにおいては、児童が主体的に取り組むことができるような教材・教具の工夫に努めた。色を塗る活動では、塗りやすい状況づくりだけではなく、どうなれば終わりののかという工夫が必要であった。
⑤教師・友達の かわり	・活動内容により、小グループを構成し、教師も一緒に活動することで、友達と同じ場所で活動したり、友達や教師の様子をじっくりと見たりする姿が見られた。
⑥保護者・地域の 人々とのかわり	・地域（睦寿会）の方々と畑作りでは、自分から手を携えて畑に向い、共に活動する児童もいた。畝作りでは、畝の使い方を教えていただき、笑顔を見せ、一人でやろうと意欲を見せていた。

【実践例2】 中学部生活単元学習「ミニショップ
なかまを作ろう」

(1) 授業づくりについて

① 単元について

本単元は、中学部の全生徒が、自分たちが作業学習で作っている製品を、地域の方々に販売するための無人販売所を校地内に作るものである。「建築」、「資材」、「土木」、「木（もく）れんが」の4つのグループに分かれて活動し、建物及び周辺の整備を担う。

② 支援の手立て（6つの観点）

ア 単元・題材の設定

自分たちが作った製品を販売するための店舗を作る、という实际的で必然性が感じられるようなテーマを設定し、意欲的に取り組むことができるようにした。

イ 日程計画

この期間中、全員でテーマを共有し、また生徒にとって分かりやすくまとまりのある学校生活とするために、午前の2時間のほかに、午後の時間も活動にあてることとした。また、単元の最終日に店の完成パーティーとオープンを予定することで、期待感や達成感に結びつくよう考えた。

ウ 活動内容

これまでの生徒の様子や経験から、それぞれの得意なこと、できそうなことを見取り、活動内容を「建築グループ」、「資材グループ」、「木れんがグループ」、「土木グループ」の4つのグループに分ける。このことにより、自分のもっている力の発揮につながると考えた。

エ 場の設定、教材・教具

場の設定について、4グループそれぞれが最も活動しやすい場所で行うこととする。グループによっては建設予定地と離れているため、お互いの活動の進み具合を見合って、達成感を共有するためにも別の授業時間に全員で建設予定地を見る機会を設けることとする。グループごとの活動の場の設定について

は、一人一人の活動がよりスムーズで自立的に行えるような配慮、作業を分担する場合は連携がスムーズに行えるような配置の工夫、仲間の活動が分かるような工夫を行う。

教材・教具については、できるだけ自立的に活動できるように安全に留意することと、一人一人に適した道具の選択や工夫をし、自分から進んで存分に活動に取り組むことができるようにする。

オ 教師・友達のかかわり

本研究では、同じテーマに向かって活動する人すべてを「仲間」ととらえており、生徒が存分に活動し、やりがいと期待感を得られるように教師も仲間として共に活動し喜びあうようにする。必要に応じて励ましや賞賛、あるいは説明や合図といった声をかけたり、直接支援をしたりすることもあるが、自立的な姿が見られる場合には、さりげない支援を心がけることとする。また、みんなの気持ちがまとまり、雰囲気盛り上がる様にテーマそのものについて話題にすることもあって良いと考える。

友達とのかかわりについて、友達は真に「仲間」であり、お互いの活動を見合って意識しあったり、励ましあったりというかかわりが自然に生まれるようなグループ内での役割分担や活動位置の工夫を行う。

カ 保護者・地域の人々とのかかわり

単元期間中の様子を写真入りの通信で各家庭に知らせることで、家庭においても学校での様子を話題にし、期待感や達成感を共有することができるものと思われる。また、今回の活動では、土木や建築の専門的な知識を必要とするため、岩手県立大学の一級建築士である先生や、岩手大学地域連携推進センター、岩手県中小企業家同友会様より、必要なアドバイスや現地での実際の作業協力等をお願いすることとした。建物に関してはプロの方と一緒に活動したり、作業を分担したりする機会を設ける。また、専門的な技術と材料に

関するアドバイスをいただくことを考えている。木れんがについても造園の専門家から製造と設置の方法をアドバイスしていただく。これらを通して、より実地的な活動が計画され、一人一人についての具体的な支援の手立てを講じ、完成度の高いやりがいのある仕事に取り組むことが可能になると考える。プロの方々においても、現場では共に活動する仲間として、協力し合い、完成を楽しみにするなど、思いを共有していきたいと考える。

③ 活動の様子

「建築グループ」は基礎の束石設置のための穴掘り作業からスタートし、材料の採寸、切断、骨組の組み立て、壁のベニヤ張り等仕事内容が日ごとに変わっていった。



写真5 ビスを打ち込む様子



写真8 木れんがを並べる様子

「資材グループ」では、建物の内装、外装に使用するユニット（半分に分けた丸い木材7本をベニヤにビス止めしたパネル状のもの）を流れ作業で製作した。合計で100個を超えるユニットを作ることができた。



写真6 ユニットに塗装を行う様子

「木れんがグループ」では、建物の周辺に敷設する木れんがを製作した。大量に頂いてストックしていた廃材を丸のこで同じサイズに切り、その2つをタッカーで固定した。



写真7 丸鋸で廃材を切断する様子

「土木グループ」は、木れんがを敷き詰めるための掘り起こし、砂利や砂の運搬、「たこ」という道具を使つての突き固め作業を行った。また、「木れんがグループ」のメンバーが運び込んだ木れんがを市松模様に並べた。

10日間における単元を通して、多くの仲間と共に取り組んだ店を完成させることができた。保護者の皆さんからは、「いらっしやいませ」という幟をプレゼントしていただいた。完成式・パーティーではお世話になった方々をお招きし、喜びを分かち合った。



写真9 完成を喜び合う様子

(2) 成果と課題

表2は、成果と課題を6つの観点に即してまとめたものである。

表2 成果と課題

項 目	成果と課題
①単元・題材の設定	・単元・題材の設定に関して、作業製品を売る場を作るというテーマは自然で分かりやすく、子どもたちの生活に即した単元であった。また、多方面の専門の方とのつながりをもてるような単元であったことは、本物に迫るためには非常に良かった。
②日程計画	・日程計画に関して、まとまりのある時間設定により、テーマのある生活を体感することができた。生徒にとっては見通しをもちやすかったようで、気持ちも落ち着いていたように思われる。 ・しかしながら、当初の計画では作業が追い付かず、グループによっては活動量が豊富できつい日程になった。次単元では、今回の様子から適切な計画・内容にできると良い。
③活動内容	・活動内容に関して、プロを交えての活動の良さが感じられた。プロの一言で上達するなど、本物の活動は集中力、やる気、様々な面でとても有意義であった。木れんが、資材、土木グループの活動は同じ活動を繰り返すことができ、より自立的な姿が見られた。また、4つのグループに分かれたことにより、それぞれに合った活動を用意することができ、「みんなで作り上げた」という達成感にもつながった。
④場の設定 教材・教具	・場の設定に関して、互いに全体を見渡せるような設定や、材料の運搬など自然な形で他のグループの様子を見るようにしたことで見通しをもちやすくなった。 ・教材・教具の工夫に関して、資材グループでは生徒がそれぞれに好きなこと、頑張れることに向き合えるような道具等により、自立的な姿がみられた。教材・教具の工夫については、今後も改善を図っていきたい。
⑤教師・友達の かわり ⑥保護者・地域 の人々との かわり	・仲間とのかかわりに関して、プロの大工の働きぶりやアドバイスをしっかりと見聞きし、真剣に取り組むことで技術が上達し、意欲も増した。また、同じ活動に取り組む友人を称賛したり、励ましたりする様子が自然に見られた。見学に来て下さったり、幟をプレゼントして下さったりするなど、保護者が一緒に応援して下さっていることが伝わり、活動が盛り上がった。

【実践例3】高等部社会生活学習選択活動②「ボウリング」

(1) 授業づくりについて

① 題材について

本題材は、「プール」、「ボウリング」、「バスハイク」の3つの活動の中から「ボウリング」を選択した生徒たちが、自分たちでボウリング大会を企画・準備し、ボウリング場に出かけて大会を行った学習である。

② 支援の手立て（6つの観点）

ア 単元・題材の設定

「ボウリング」は、生徒にとっては余暇活動として定番のもので、実際に福祉事業所でもレク活動として実施しているところが多い。また、盛岡圏域には複数のボウリング場があり、家庭を含め利用する機会の多い余暇活動であると考えられる。利用する際の手続きがどのボウリング場でも同じような流れであることから、学習を重ねることで実際の場面で生かすことのできる活動であると考えられる。

今回は、計画や運営を生徒主体で行うことで、生徒一人一人が自由に楽しむ時間だけでなく、仲間と一緒に楽しむ時間であることを理解し、自分で、自分から、自分らしく余暇活動を楽しむことができるようにと願い本題材を設定した。

イ 日程計画

ボウリング大会を自分たちで企画し、準備を進めるなかで、活動を楽しむために必要なスキルやマナーなどを学習すると共に大会に向けての期待感を高めながら、当日を迎えられるような計画を設定した。

ウ 活動内容

できるだけ生徒主体に取り組むために自分たちでボウリング大会を企画し、進められるような活動を行った。ボウリング大会運営係、昼食係、表彰式係の3つに係分担し、自分たちで活動する場面を多く設定し、全員で大会を盛り上げ楽しむことができるようにした。

エ 場の設定、教材・教具

事前の学習では、ボウリングの球などの実物や写真やVTRなど視覚的に分かりやすい教材を活用して、活動の見通しをもちやすいようにした。また、教師や友達から説明されたことをメモできるようにワークシートを用意した。

当日は、生徒がボウリング大会を進められるようにレジュメを生徒自身が作って用意できるようにした。また、生徒個々の実態に応じたスケジュール表や靴のサイズカードを用意した。ボウリング場では大会の雰囲気盛り上げるために隣同士のレーンにした。

オ 教師・友達のかかわり

事前の学習では、教師は生徒の活動を見守りながら、生徒が支援を必要とした時に自分から伝えられるように支援する。当日は、教師も生徒と一緒にボウリング大会に参加しながら、盛り上げた。

カ 保護者・地域の人々とのかかわり

今回は、特に設定しなかった。

③ 活動の様子

ボウリング大会の準備では、各係ごとに昼休みや、休憩時間を利用して教師と共に自分の仕事を確認し、進めることができた。パソコンを利用してワークシートを製作したり、メンバー表の名札を作ったり、賞品を準備したり、弁当の注文表を作るなど自分たちで準備を行った。



写真10 パソコンでワークシートを作成

また、大会前日には、各係が準備してきたことを発表する場を設定した。自分の役割を理解して、どの生徒も発表することができた。また生徒が発表することで、教師が話す時よりも集中して聞く姿勢が見られた。集団の中で自分の係活動を遂行することで、自分でできる自信をもつことができた。

ボウリング大会当日には、生徒が道案内したり、表彰式を実施したりするなど生徒が中心となって進める場面が見られた。ボウリング大会で同じレーンでストライクを取ると拍手やハイタッチをするなど、一人で楽しむだけでなく仲間と楽しむ場面が見られた。



写真11 準備した内容を発表する様子



写真12 自分で靴を選ぶ様子



写真13 ボウリングの様子

(2) 成果と課題

表3は、成果と課題を6つの観点に即してまとめたものである。

表3 成果と課題

項 目	成果と課題
①単元・題材の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の選択した活動を取り入れたことで、生徒は「自分から、自分で、自分らしく」活動することができた。 ・ボウリング大会を生徒が自分達で計画・準備・実行することで、生徒一人一人が自立的に活動する姿が見られた。 ・今後の余暇活動については、出かけて施設を利用することなどに限定せずに、日常的に生徒自身が気軽に行える活動を考えていく必要がある。また、働くことと余暇活動とのつながりについて、さらに考えていく必要がある。
②日程計画	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒達は、ボウリング大会の場所や日程を決めたり、必要なお金を調べたり、昼食の注文を集約したり、商品の準備を行うことなど、ボウリング大会の準備を行うことで、ボウリングに行くことへの期待感をもちながら活動に意欲的に取り組むことができた。 ・実際の活動は、日程計画以外の時間にも生徒の自主的な活動として行われていた。 ・生徒主体とした活動とするための日程計画の組み方をどのようにしていくかが、今後の課題と考えられる。
③活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・活動はボウリング場に出掛ける事前学習のため、調べ学習が中心であった。 ・生徒が自分達で計画・準備・実行するのは初めてであったが、前回のボウリング活動の経験を生かすことで見通しをもち、自分で考えて活動する姿が見られた。 ・生徒は自分達で企画することで、仲間と楽しむことを意識できた。 ・生徒個々のねらいに合わせてグループ分けを行い、準備の活動からグループごとに活動した。役割や仲間を意識して活動することができた。 ・生徒は集団の中で自分の係活動を遂行することで、責任感や自分でできる自信をもつことができた。 ・みんなの前で発表する場を設定することで、生徒は相手に聞こえる話し方を意識することができた。 ・生徒は自分の係活動の成果を発表することで、自分の活動に自信をもって取り組むことができた。
④場の設定 教材・教具	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒は自作の発表用原稿を用意することで、自分の活動に見通しをもって取り組む姿が見られた。 ・靴のサイズカードを生徒が使いやすいよう携帯用にコンパクトにした。実際のボウリング場でも有効であった。
⑤教師・友達の かかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が計画したり、調べたことを、ボウリンググループの仲間に発表することで、発表する生徒も、聞く生徒も集中して聞くことができていた。 ・教師は生徒の活動を見守り、生徒が支援を必要とした時に、自分から伝えられるような行動を引き出すことができた。 ・ボウリング場では、生徒は仲間同士で喜び合う姿が見られた。 ・次回への期待や、1位になりたい、など自分の思いを話す生徒が見られた。

Ⅳ. おわりに

1 研究のまとめ

2年次目である今年度は、児童生徒が自分の力を十分に発揮し、主体的に活動する姿を目指し、授業づくりにおける6つの観点に即して支援の手立てを工夫しながら、授業実践を積み重ねてきた。

その結果、どの学部においても、活動内容を理解して見通しをもって自分から活動したり、活動への興味をもって集中して取り組んだり、様々な人とかかわりながら意欲的に活動したりするなど、今もっている力を十分に発揮しながら主体的に活動に取り組む様子が多く見られた。

このことから、6つの観点に即して児童生徒を取り巻く環境を整えていくという授業づくりが有効であり、社会生活力の育みにつなげることができたと考える。

児童生徒が興味・関心をもって取り組んだり、真剣に取り組んだりできる单元・題材の設定、一人一人に応じた活動内容の設定、自分から進んで活動できる場の設定や教材・教具の工夫、教師や友達を中心とした周囲の人々の適切なかかわり等の大切さを理解することができた。

2 今後の課題

現在及び将来において、児童生徒が自立的・主体的な生活が送れるよう、今回の研究を踏まえながら、さらにより良い授業づくりの在り方を追究していきたい。

文 献

最上一郎・田淵 健・藤原有紀・立原幸枝・今井真実・長谷川智教・我妻則明・鎌田文聰・宮崎眞・名古屋恒彦・田代高章（2009）：社会生活力を育む授業づくり ―自分の力を十分に発揮していくための支援を通して―，岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，第8号，pp189－200.